

## 症例報告

# 摂食嚥下訓練により意識障害の改善のみられた一症例 ～意識障害患者への積極的看護介入～

上越総合病院、6階南病棟；看護師<sup>1)</sup>、5階北病棟；看護師<sup>2)</sup>、  
6階南病棟；主任看護師<sup>3)</sup>、看護師長<sup>4)</sup>

竹澤 好美<sup>1)</sup>、神野 朋美<sup>1)</sup>、大滝 智子<sup>1)</sup>、伊藤美千代<sup>1)</sup>  
野崎 敏美<sup>1)</sup>、南雲 朝子<sup>2)</sup>、丸田 直美<sup>3)</sup>、石山 俊行<sup>4)</sup>

背景：摂食嚥下訓練が意識状態の改善に有効な刺激となっているとの報告がある。

症例内容：広範囲な脳出血を認め、長期間にわたり経管栄養を行っていた。リハビリも実施しておらず、生活に何らかの変化をもたらすため坐位訓練、摂食嚥下訓練によるアプローチを行った。訓練開始350日目にはミキサー食を摂取出来るまでになったと共に、笑う、泣くなどの感情の表出も見られるようになった。

結論：摂食嚥下訓練が意識状態の改善に有効な刺激となる。

キーワード：摂食嚥下訓練、積極的看護介入

## 背 景

「食する」ことは人間が生きていく上で欠かせない行為であり、人間の基本的欲求の一つである。しかし意識障害患者はその状況から長期臥床となり、経口摂取ではなく経管栄養における「食」を選択されることが多い。

上越総合病院6階南病棟（以下当病棟）では、意識障害を持つ患者が多く入院している。当病棟において長期経管栄養を受けている患者の嚥下状態の改善をはかり、食事の経口摂取に繋げることを目的とした研究を行った。摂食嚥下訓練が意識状態の改善に有効な刺激になっているとの報告があり、経過の中での反応の変化を抽出し、振り返ったので報告する。

## 症 例

55歳男性、左被殻出血術後（平成17年9月）右片麻痺 全失語 意識障害があり、積極的なりハビリは実施されず長期間にわたり経管栄養を行っていた症例。

若年であり、生活の中で何らかの変化をもたらすため、坐位訓練と棒付き匙をなめる援助を取り入れたところ、空嚥下が確認できた。そこでA氏のお好みであるコーヒーにとろみをつけ、週1～2回より摂取を開始、楽しみの時間とすると共に、コーヒー味のアイス棒を作成し1日2回アイスマッサージを併用した。訓練開始120日目頃より、アイスマッサージに対する開

口もスムーズとなり、150日目頃よりとろみ付コーヒーは連日摂取となった。摂取当初は、口腔内に残渣が多く見られたが、日を追う毎に少なくなり、上手に飲み込みができるようになった。

その後、より食事の気分を味わうため、食堂にてエプロン着用し机に向かい摂取することとした。摂取し始めた頃より、声かけにうなずく、声を出して笑う、サングラスをかけるとはにかむといった表情が見られた。またコーヒーカップを持たせると自ら口を付けすろうとしたり、ティッシュを渡すと口の周りを拭く、周りで動く人を追試するなどの動作が見られた。訓練開始300日目よりエンゲリートゼリーを追加、310日目より昼のみ開始食を開始。その頃より声を掛けると泣く姿が多く見られるようになった。350日目より1日3回のミキサー食（主食のみ全粥）を開始した。その頃より移乗時に険しい目つきで「ばーかー」と言ったり、「かー」「あー」などの発語が聞かれるようになった。ケアの中では、オムツを開くと上着で隠そうとする、着替えをすると自ら手を通そうとするなど以前に見られなかった行動も見られるようになった。

## 考 察

今回のケースは発症より経管栄養を継続し数年が経過、身体的にも精神的にも活動性の乏しい状態であった。そのような状況の中、患者の活動性を高めようとする援助がきっかけとなり、摂食嚥下訓練に取り組むことができた。慢性期で症状の固定している患者であっても、看護師の積極的な働きかけにより患者に変化をもたらす看護介入ができたと考える。

寝たきりであった患者に対し、坐位を保持し、匙をなめるという刺激が意識の覚醒を促したと推察される。摂食嚥下訓練や機能的口腔ケアを繰り返し行う中で、A氏は呼びかけに対し反応を示し、笑う・泣くなどの感情が表れるようになった。さらに怒ではあるが、発語も聞かれるようになり、訓練前のケアに対して拒否を示し抵抗するだけの怒とは違う感情を表出することができた。継続した摂食嚥下訓練と食事の類似動作がさらに意識の覚醒を促し、精神機能の活性化に非常に影響をもたらしたと推察される。

健康時何よりも好きだったコーヒー味をアイスマッサージや直接嚥下訓練に取り入れたところ、A氏の受

け入れも良く、自分でカップを持って自ら口をつけず  
すろうとする行動も見られた。

今回、訓練の段階より食堂に出たことで目や耳は  
じめ、五感から外部情報が入りより多くの刺激とな  
った。人間が本来持っている五感を刺激することが、よ  
り効果的に意識状態を改善し、無反応・無表情であ  
った A 氏が様々な感情を表出するようになったと考  
える。摂食行動が感情の芽生え、基本的な日常生活動  
作につながるきっかけとなり、より人間らしい生活  
を送る上で重要な役割を果たしたと考える。

## 結 論

1. 摂食嚥下訓練は意識状態の改善に影響をもたら  
し、また患者の五感を刺激することでより効果がみ  
られた。
2. 継続した摂食嚥下訓練が精神機能の活性化に非常  
に影響があった。
3. 意識障害患者においても積極的な関わりにより看  
護介入が可能である。

## 参 考 文 献

1. 2. 後藤則子、山尾綾子、薄木友美絵、他. 経口  
摂取が患者に与える効果. BRAIN NURSING  
1995; 11(4): 68.
3. 田村綾子、桃田多香子. 意識障害時の評価と対応.  
臨床看護 1994; 20(14): 2238.

## 英 文 抄 録

### Case Report

A case with an improvement of consciousness by a feed-  
ing-swallowing training -positive nursing intervention in  
patients with disturbance of consciousness-

Joetsu General Hospital, Ward of southern 6 th-floor<sup>1)</sup>,  
Ward of northern 5 th-floor<sup>2)</sup>; Nurse  
Yoshimi Takezawa<sup>1)</sup>, Tomomi Kanno<sup>1)</sup>, Tomoko Ohtaki<sup>1)</sup>,  
Michiyo Itoh<sup>1)</sup>, Toshimi Nozaki<sup>1)</sup>, Naomi Maruyama<sup>1)</sup>,  
Toshiyuki Ishiyama<sup>1)</sup>, Asako Nagumo<sup>2)</sup>

Background: There was a report that a feeding degluti-  
tion training was effective for the improvement of  
the consciousness state.

Case: Because of a large wide cerebral hemorrhage, a tu-  
bal feeding had been done for a long term without  
any rehabilitation. We provided trainings of sitting  
and feeding deglutition. On 350 th. day after the  
above training he could take liquidized meal,  
smile, and cry.

Conclusion: Feeding deglutition training is effective for  
the improvement of the consciousness state.

Key Words: feeding deglutition training, positive nursing  
intervention, disturbance of consciousness

2008/12/01 受付 (2008-21)